

シリーズ
地質調査のパートナー(3)

ルーペ

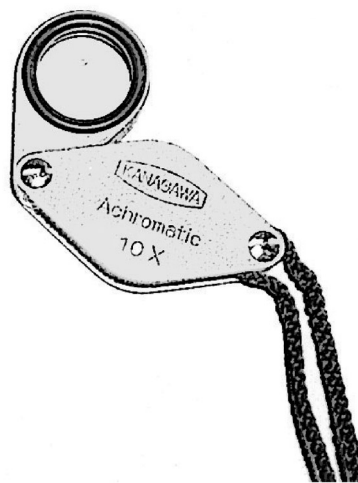
中川 充¹⁾

頭や顔はともかくとして、目は良かった。視力検査で2.0を出したこともある。おかげで老眼にも早くなった。そこでようやく気づいたのが小さなルーペの偉大さである。そして、自分が若いころ、ルーペでの観察を強く推奨した先達らの本当の理由が・・・

前回紹介のあったホンジュラスの山師さんも使うと、何気なく書いてあったルーペ。いわずと知れた凸レンズだが、これへのこだわりを抱くようになるためには、さよう歳月が必要なのかも知れない。子供のころ愛用？した虫眼鏡だが、いつの間にか持ち歩く事がなくなる。小さなものを拡大してみることができる魔法の小道具。探偵が犯人探しをするときの象徴的ポーズで手にされるものだが、今風とはいえないか。しかし野外での地質調査では、形こそ違おうが今でも必需品であろう。

携帯性とレンズの保護も兼ねて回転収納式が一般的だ。小さく軽いに越したことは無いのだが、存在感まで薄くなってよく忘れたり(一眼レフの交換レンズで代用する裏技あり)、失くしたり(当然水に沈む)するアイテムともいえる。それを防ぐために、お気に入りの(黄色い)紐を付けて首から掛けるという技²⁾がある。ネックレス気分だが、お洒落と思う人はまずいない。紐が絡まる弱点もあるので、キーホルダーのようになっているものをポケットに入れている人もいる。好き好きだろう。ちなみに学生時代に買った最初のルーペ(8倍)は、まだ自分の手元に残って活躍を続けている。

ルーペは原理が単純なだけに、当世それぞれ百均ショップでも買える代物である。それでもそれなりに使えるが、さすがに(セミ)プロ用とはいえない。レンズにつきもの色収差(光の波長の違いで起きる像の滲み)を補正したアクロマート(宝石鑑定用など)の売り文句が高いけどお勧めである。倍率は何をどの



ように見るかによるが、10倍前後のものが視野の広さや明るさと、大きさのバランスが良い。普通、倍率が高くなるほど、視野が狭く暗くなり、ピントの合う範囲が狭まり、重量は重くお値段も高くなる・・・それでも、いざというときのために20倍を用意しておくというのが岩石屋としての一つのこだわりかも知れない。化石屋には10倍前後で径の大きなルーペを愛用する人も多いと聞いた。

探偵スタイルがあまりに印象的なため、初めて使う人はつい小さなルーペでも目から離してしまう。これでもピントは合うのだが、像が逆さまになったりしてよろしくない。ルーペを手で眼鏡ぐらいの距離に置いて、岩石など見ようとする試料を違う手に持つ。その試料をルーペのすぐ後ろに近づけてピントが合ったところで観察するのが正解。その際、観察部分は明るい方が望ましいので野外だと直射日光に当てることになるが、決してその姿勢で太陽を覗いてはならない。これは、新品でも借り物でも、長く連れ添ったにしても、パートナーとの熱き変わらぬ約束事である。

1) 産総研 地質情報研究部門・北海道産学官連携センター

キーワード: ルーペ, レンズ, 野外調査